正直ということ

へ戻る

今年は20世紀最後の年です。年の初めに考えた私の今年のテーマは、正直ということでした。新しい時代には、新しい価値やモラルが求められます。世紀末の年にこんな使い古された修身用語を引き出してきて、どうかなと思いましたが、この簡潔な二文字がなんとも重心の低い、しなやかでしかも睨みのきく、言葉ではないかと思えたからです。

正直の語源は定かではありませんが、広辞苑には、正直という道具があると記されています。家屋や柱などの垂直を計る道具です。私は、これはいけるぞ！と思いました。

近代思想では、自我･欲求が行動規範の原点とされ、正直という価値がゆがめられてきたのではないか。正直とは本来、天地に向かって真っ直ぐであることだったのではないのか。天という自然の摂理、地という社会の基本ルールを基準とすることが、正直ということだと考え直せば、21世紀に蘇生できる価値ではないかと思えたのです。

21世紀は環境の世紀です。生態系的に持続可能な社会でなければ人類の生存そのものが危ういのです。自然環境に対して負荷を与えて省みず、支配しようとしてきた20世紀文明は転換されねばなりません。21世紀の社会が、人と環境にやさしい社会でないならば、私たちは破滅の道を選んでしまうことになります。

正直とは自己の欲望に従順ではなく、地球自然の摂理に謙虚であるという意味になります。
正直という二文字の言葉から連想されるのは、「自然真営道」を説いた江戸中期の啓蒙思想家･**安藤昌益** の「直耕」ということです。

衆人は直耕して　天道不背の真人なり

封建社会にあっても徹底した平等主義を唱え、農の哲学を背景にして、自給自足の直営の思想を展開した八戸の医者です。私たちをとりまく世紀末の20世紀文明は、このような方向に活路を開いていけるのでしょうか。

足尾鉱毒事件に命を懸けた明治の義人、**田中正造** は書き残しています。

真の文明は　山を荒らさず川を荒らさず　村を破らず　人を殺さざるべし

情報通信革命の21世紀は、匿名性と記号的効率性を特徴とする文化です。「水に書かれた文字」のように不安定さを宿命的に持つ、バーチャルリアリティの文化です。そして同時に、生命科学の時代でもあります。私たちの「いのち」とコミュニケーションが問われています。

非物質的な不安定さを持ちながら、肉声のコミュニケーションの確かさをどうクロスさせていくのか。そして、21世紀人類はどのような文明を築いていくのでしょうか。
求められているのは、いかに生きるかというモラルであります。

2000年　正月　　衆議院議員　小林　守